

# べっふの文化財 No. 7

## — 天間特集号 —

- 地理的環境
  - 歴史的背景
  - 石造文化財
  - 民俗文化財
  - 天間地区史料
  - 綜合年表
- 主な内容



(天間盆地の村落)

別府市美術館

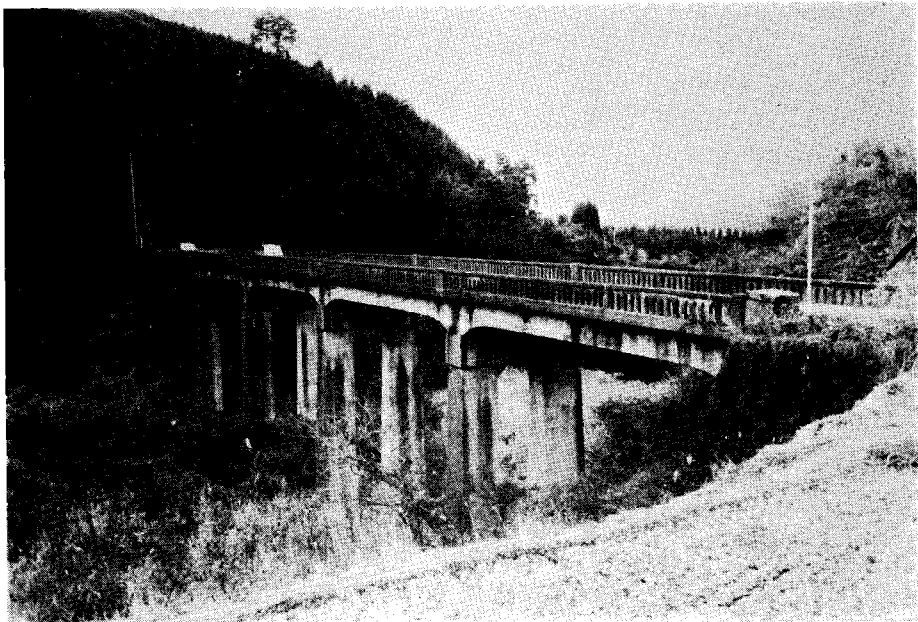
別府市教育委員会  
別府市文化財保護委員会

# 天間の歴史と文化財

## 別府市文化財天間調査班

- 安部 巖
- 入江 秀利
- 後藤 武夫
- 藤内 喜六

### (一) 地理的環境



国 境 橋 (後藤清澄氏提供)

天間は、別府市の北西部にある山村で、別府駅から、バスで約1時間、海拔460m、東経131度24分12秒・北緯33度13分59秒の地点で、その面積は14.38㎢、周囲は山高く、河谷が深いため部落のある地域は、盆地状の台地で珍しい様相を呈しているが大部分は高峻な山地と高原からなっているが、部落の東方は、海拔600mの猫ガ岩山・海拔約400mの十文字原の間を通る主要地方道12号線(別府一院内線)をもつて別府と結ばれ、南は、南西約2.300mの地点にある雛戸山(891m)と南東伽藍岳硫黄山(1.045m)の間を津房川が北流するが、おおこ小野より南伸びる道路は、伽藍岳の山麓を通り塚原盆地の中釣・塚原等と結ばれているが西は、南西の雛戸山を中心とする山嶽地帯が続いており、北は、津房川戦川にはさまれて突出した台地となり耕地が開けており天

間水田地帯の主要部をなすが、北西津房川にかかる国境橋を境とし北は安心院町と境している。

なお、表土地質は、学校付近は木固結堆積物の泥や砂であり、おおこ小野付近は、火山性岩石の流紋岩熔岩、部落西側山地は、火山性岩石の含輝石安山岩熔岩である。

以上地理的位置、地質について記したが、かかる環境の中では、産業面にもその影響がはつきり出てくる、それを農業と土地利用の面からながめると、昭和36年の場合水田約30ha(1戸当55アール)で、畑地は総面積7ha、山林10ha以上となっており、共有地は、山林10ha、原野140~150haで、共有原野の占める割合が非常に大きい、これを生産面からながめると、同年(S.36)で、米約2,000俵(1,200俵出荷)麦自家用・牛72頭・木炭年間約2,500俵・竹材150束等が主なものであり、その外、

別府市美術

にわとり・山羊・豚等の飼育、木材、薬、こんにやく、野菜等の生産がおこなわれていたが、同年以後、高度経済成長と工業重視の影響を受けて、公務員、会社員等の自然増加は農業の兼業化を促し生産量は激減した、中でも、木炭・牛等の激減には目を見はるものがある。

(注) 参考資料

1. 昭和47.8.4指定「表層地質図 Subsurface Geological Map」
2. 昭和48.8.31「別府市誌」
3. 建設省国土地理院「 $\frac{1}{50,000}$ 地形図」
4. 昭和36年「私たちの郷土天間…天間小学校編」



八幡天間宮 (後藤清澄氏提供)

(二) 歴史的背景

この地方に人々が住みついたのは遠い昔である。天間小学校北方正門寺附近の水田地帯に弥生土器の細片が見られたり、南端大所南方の畑地から石鏃が発見されたりすることは、この地方に古くから人々が住みついていたことを意味するものであるが、中世において天間は、南端とは別の行政区域に属していた。

豊後国志卷之三速見郡村里の條に

「…首畧…」自<sup>上</sup>属<sup>二</sup>・大内箇平<sup>之</sup>支<sup>目</sup>…(中畧) 以上六十村、舊属<sup>二</sup>山香郷<sup>一</sup>在<sup>二</sup>郡西北<sup>一</sup>……塚原・天間…(中略)…以上三十三村、舊属<sup>二</sup>由布郷<sup>一</sup>郷在<sup>二</sup>郡西南<sup>一</sup>

とあり、南端地方は山香郷に属し、天間は塚原と共に由布郷に属していたことは、夫々別の文化圏として発展したことを意味するが、天間部落はどのような発展過程をたどったのであろうか。

伊南家記録に

「天慶年間伊南定胤その領地下総国伊南ノ里ヲ平将門ノタメニ奪ハレ九州ニ趣ク、頃ハ天徳二年三月四極山

麓ニ着、夫ヨリ有縁の地ヲ尋ケルニ、四月廿五日、右山ノ麓ヨリ出立、木綿山ヲ目當ニ、西ニ向ヒ……(中畧)……遙カニ西北ヲ見レバ折節雨降り霧深ク四方ヲ埋ムルニ此地雨晴テ日照四方皆山秀テ森々タリ……是コソ我有縁ノ地……雨中ニ雨晴、日照ケル故ニ雨間ト号……」

と記されている。このことを、前に記した遺物の出土豊後国志の記録等と併せ考える時、天慶・天曆・天徳以前人々は既に住みついていたが、更にこの地に伊南氏を中心とする人々の集団が住みついてきたことを意味するものであろう、では人々は、どのような生産手段を持ちながら生活を営んだのであろうか。

この地域は、盆地型地形でありかなり広い平地を有するが、附近を流れる津房川の河谷は深く容易に水を得ることができなかつたから、畑作を主とする焼畑農業が主な生産手段であつたと考えられる。尚この頃(室町時代の生活について輝しい史料に接し得ないが文正元年(1466)おおこ小野に石幢が建てられたり、宮ノ本に宝篋印塔が建てられたりしていることは、僅かな遺物ではあるか当代を知る手掛りとなるであろう。

江戸時代になると、この地は天領となり、日田代官の支配下におかれるが、さきに述べたごとく水不足のため米作農業はふるわなかつた。正保4(1647)年、代官小川藤左衛門治下の頃豊後国郷帳に総石高は93石8斗9升4合で、その内田高は57石7斗1升、畠高は36石1斗8升4合あり、水利の便悪く日損所の多かつたことが記されている、更に伊南家先祖事跡記録に

「一、天間村用水無之故、唯待雨天草木用地雖之有(ヨメズ) □大河之流溪深而不得閔留故天下雨則早魁時刻到。遠近富貴也、我居所者飢饉之爛、村民相共非嘆無止、然(ヨメズ) 用水井与無企」

と記された程であつたが、寛文九年(1669)伊南与三兵衛は村民と相議し、村民の出夫によつて3カ年の年月を費し寛文11年春水路の完成を見てから天間村の村況は一変した。その間の事情は同書に、

「寛文九年酉之孟春於村民相語而云無<sup>二</sup>井手<sup>一</sup>者、五穀不熟田園不<sup>レ</sup>実、冬ニ出<sup>二</sup>人夫<sup>一</sup>堀<sup>二</sup>水道<sup>一</sup>、(中畧)水道堀支干間餘漸水流而潤十分也、同十年戌之仲春、同十一亥之孟春凡三ヶ年相続而高処堀之、深処者浅之、僻処者通之故水流始寛而潤諸草万木田地百倍(下略)…」

と記されているが、このよるこびもつつかのま、翌年の豪雨で水道や堀抜きはごとく崩れおち、3年の功は1時に消え去つてしまつた。村民は悲歎の涙にくれたが、貞享4年(1687)春になると、また村民は相謀り、再び日夜を分たず修復し、遂に水路の完成をみた。その結果については同記録に「其功如<sup>レ</sup>思成就畢、到今流水如大河、

別府市美術

而溢= 遠村近隣之田- 園、是誠予謀之記也」と記しているから貞享の頃は既に今日の天間が築かれていたであろう。

その後30年正徳4年(1714)になると山神社造営の議かおこり、山神の類号を由原八幡神主の祭典執行で八幡天間宮と改め、神社造営をおこない、正徳6年(1716)八幡宮は完成した、棟札に

「正徳六申歳  
八幡宮奉寄進<sup>肥州</sup>願主 吉田 伊定<sup>(保カ)</sup>  
助実

七月初二日 昔天間村民家<sup>敬白</sup>

と記されたが、ついで4年後、享保4年(1719)秋には、拝殿に修理を加え、神社としての体裁を整えたが、その後は、文政4年(1821)にも修理がおこなわれ直四郎・氏子中より鳥居が寄進された、なお文政の頃には正圓寺の再建もおこなわれたもようである。

明治6年(1873)3月江戸時代の村制を改め、大小区制がとられるようになると、天間村・南端村はともに第二大区十七小区となり、戸長に宇喜多基治・松本希賢がなり副戸長に、伊南七郎が就任し区政をおこなった。

ついで明治11年11月、郡町村が新たに編成されることになり、独立した天間村と南端村が誕生する。明治22年4月1日よりは更に新たな市町村制の公布となり、南端村と天間村は合併して南端村となり、村役場を大字南端字薄尾3725番地におき、明治・大正・昭和と長く続いた。

その間村民は、農業養蚕、林業、畜産等をおこないながら生計をたてた。

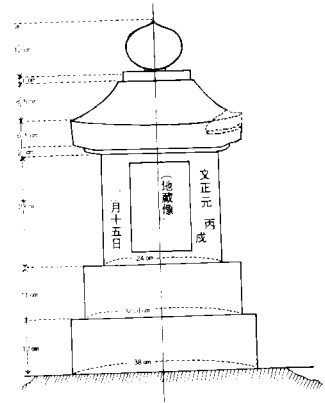
ついで、昭和31年4月1日になると天間地区の人口470人、面積14.88平方キロメートルは別府市に合併し今日に至る。

(注) 参考資料……唐橋君山「豊後国志」享和3年・伊南喜隆蔵「伊南家先祖事跡記録」元禄8年・天間八幡宮棟札南端村誌・豊後国近世地方史料「村里」・豊後国郷村総記・別府市誌外、

## 三 石造文化財外

### 1. 文正石幢

(1) 位置 大分県別府市大字天間字おおこ小野石幢は、部落を東西に走る主要地方道十二号線(別府院内線)から南に約50mはいつたおおこ小野塚原口の旧道交叉点の中央巨石上にあるが、道を境として北東には山林(竹)・南西はなだらかな台地であり畑地となっている。



文正石幢

### (2) 時代と調査の沿革

この塔は、室町時代中期、文正元(1466)年丙戌の年で建立当時からの地にあり、村民関心の的であった。昭和33年8月始めて年号が確認されてからは、この塔に対する関心が一層高まり、昭和34年には、望月友善氏の「大分県に於ける石造遺物調査」の対象となり、ついで、昭和36年には、天間小学校社会科グループによる研究対象となつたが、これは、以上のような経過をたどつて此度びの別府市文化財保存会の調査をわかつた。

### (3) 構造

塔は総高76センチメートル、凝灰岩に刻まれている



文正石幢

(昭和33年調査の時宝珠は亡失していた)が宝珠が当時のものかどうか多分にぎもんが残るが、文正元年の4角形石幢であり、形式上からも、時代の古さからも多くの問題をもっている。

### 基礎

高さ約1.5mの岩上に安置され、二重の基礎をもつが

1重は、高さ12cm巾38cmで2重は高さ11cm巾32.4cmあり平面は共に方形で彫刻は見られない、研磨については風化がひどく当時のもようを明確に知ることができない。

#### ・幢身

幢身は方形で高さ23cm巾24cm龕は正面に1部、両側面に2部、背面に1部、計6部で共に地蔵の陽刻がある、地蔵の彫刻は正面においてすぐれ、側面及び背面において稍粗雑であると見られるのは、塔の未完成を意味するものであろうか。(或は風化のため粗雑に見えるのかも知れない)

#### ・屋蓋(笠部)

宝形造りで、軒口は、写真の如く二重につくられ、上部、下部共にやゝそりを見せているが、降り棟のそりはゆるやかであり、先端においては、ややそりを持たせてあつたと思われるが、破損のため判然としなない。

露盤は厚さ1cmで一般五輪の屋蓋と同様であり上部に宝珠を支えるくりこみがある。

#### ・宝珠

昭和33年調査の時、この宝珠は見られなかったが、現在(S.50)は、写真に見られるように宝珠が置かれている。果して創立当時のものであろうか、或いは創立当時は相輪が別にあつたのではないかという疑問が残る、断定は今後の調査に期し度い。

## 2. 宮ノ本宝篋印塔

(1) 位置 大字天間、天間小学校校庭南隅

(2) 時代 室町時代(年未詳)



宝篋印塔

#### (3) 構造

この宝篋印塔は、安山岩でつくられ、塔身・相輪を欠き、基礎・屋蓋(笠)のみが現存している。基礎は高さ34cm屋蓋の高さは31cmで全体の高さを明確につかむことができない。

然し、現存部の高さ、構造から推測すれば、総高1m40程度の塔であつたと考えられ、今後の調査が期待される。

## 3. おおこ小野五輪塔群外

天間地区には、さきに記した文正石幢(1466)・室町期宝篋印塔を始め、おおこ小野五輪塔群・天高堂石仏並びに妙典塔天高堂木造仏(1794)等調査すべき対象は多いが、その完成は今後に期したい。

## 四 民俗資料

天間地方は、地域的には宇佐・速見・大分三郡の接点にあたると言える。しかも、宇佐山郷の一端として宇佐文化の影響も強く受けている筈である。しかし、いわゆる「山村・漁村の生活と文化」が、交通の整備にともない侵入して来た都会化の波に押し流されて消し去られていく現世的な傾向に、天間地方もその例外となり得なかつたようである。

## 年中行事

### 1 正月行事

年始回り ・正月三日間にお互同志年始の挨拶回りをした。狭い部落内だったのでほとんどの家を通った。

フクガリ ・(福刈り)、はじめて山に入り薪を刈る儀礼的な行事である。豊前とその隣接部に四日が多く、天間地方の民俗が宇佐、院内地方の系統が強いことを示めす。

ヤクンピラキ ・(薬師開き)九日、日頃世話になる医師のところへ鏡餅をもって挨拶に行く。

チョウイワイ ・(帳祝い)11日、酒屋の大福帳の新調祝いに招かれて酒をふるまわれる。この時、一年間の掛帖が出来る。

ヤマノカミマツリ ・(山神祭)16日、炭焼をする者が共同で祭をする。たいてい四五人が集ってなおらいをする。

### 2 春・夏の行事

ダイジョーゴンマツリ ・(大將軍祭)3月13日、おおこ小野のドーノマエにあるダイジョーゴン様の石の祠に牛や馬を連れてお参りに行った。

八幡天間宮祭礼 ・3月31日、もとは28日だった。

・牛を牧場に放牧する。交替で駄番をする。女の人の多い家は男をやとつた。牛がひとりで帰ってきたり、牧場で子牛を生んだ場所がわからず困ったことがある。

・5月20日頃、お宮に参って麦ウラシのノラヨコイをした。

・7月7日、ガンチン様にお経おあげて踊る。

### 3 盆行事

カサボコックリ ・7日、青年が正門寺に集ってカサボコ作りをはじめる。

ニワイリ ・(庭入り)13日夜、

・午後八時頃正門寺に集まる。

・事前行事、念仏あげ

・道中行列

・庭入り 1.念仏 2.和讃 3.三頭 4.シカシカ

#### 5.バンパ踊

##### ○盆踊

(詳細は「べっぶの文化財」№4に松岡実氏の著述があるので参照されたい。)

カサボコタオシ・ 14口、正門寺でなおらいがある

#### 4 秋・冬の行事

オガンジョージュ ・ (御願成就) 9月 芝居・相模・潮汲み、神楽のみくじを神主が引く。神楽は必ず奉納するが、他の三つはくじに当たったものを奉納する。

・芝居が当ると北原などから呼んできた。小屋掛は村人が材料を組み建てた。建てるのに2日片付けに1口かかった。

・潮汲みは、豊岡の海岸まで出かけて海水を汲んできた。

・御願成就の経費は、反別にかけた。

天間宮本祭 ・ (旧11月28日)

ダイツウ渡シ ・ 12月、宮座の座前が代わる。酒を親ワンで三杯つづ新山座前と神主が飲む。

### 芸 能

#### 神 楽

天間の神楽は岩戸神楽で、神楽座の座元はオバナの原



(原家太氏所蔵の神楽面)

本家であった。原家太氏が高等小学校の頃まで父、兄と共に近郷の祭礼に招かれて奉納したそうである。神楽衣裳面、はやし道具など最近まで原家に保管していたが、現在は若干の面を残すのみである。

#### 農村楽

田楽の一種で、腰篋を着し胸に締太鼓を下げ、背に羽毛またわ金銀紙で飾った旗印様の杖矛を負って神前に奉納する楽があった。辻間楽と同系統のものであると思われるが、既に文久の頃に衰えてしまった。

盆行事の和讃とシカシカ

初盆を迎える家で催される「庭入り」行事で唱和される和讃は、供養する新仏の享年により六種類に分かれている。

#### 児童和讃 (十才以下の新仏)

賽の河原と 申せしは

沙婆と冥土の 境いなり

一つや二つや 三つや四つ

十より内の 幼児が

賽の河原に 集りて

紅葉の様なる 手を持ちて

真砂を拾ふて 塔を積む

一つ積んでは 父の為

二つ積んでは 母のため

三つ積んでは 教師兄弟我が為めと

やがて日暮と なりぬれば

地獄の鬼が 現れて

積んだら塔を つき崩す

東に向いては 父恋し

西に向いては 母恋し

恋し恋しと 泣く声

谷の木霊に 響かれて

父が呼ぶかと 心得て

母が呼ぶかと 心得て

谷の木霊に 来てみれば

父と言ふ字が あらばこそ

母と言ふ字は 更になし

あら不思議や ここに亦

地藏菩薩が 現れて

子供よ何を 悲しむか

尋ねる父母は 沙婆にあり

冥途の父母は 我ぞかし

一つ所に 呼びあつめ

衣の袖を 振り着せて

げんによあれよと 回向する

#### 花田和讃 (二十才前後の新仏)

七月七日が 七・七日

四十九口に 当る日は

明日は花田の 寺詣り

寺の青縁に 腰をかけ

花園の花を 眺むれば

開きし花は 散りもせず

蕾の花の 散るを見て

さぞやわが子も あの如し

#### 善光寺和讃 (三十才より四十才の新仏)

これより空の 天竺の

学界長者の 御建立

守屋の大臣 悪討して

阿弥陀を池に 沈めたり

その後本田の 義光が

池より阿弥陀を 守り申し

昼は義光 守り申し  
夜は阿弥陀が まもりつつ  
三夜三日と いう内に  
やがて信濃に つきにけり

#### 六字和讃 (五十才以上の新仏)

婦命頂礼 天竺の  
鼻陀沙羅と 申せしは  
水は無くして 舟浮かず  
舟は白金 櫓は黄金  
六字の名号を 帆に巻いて  
新緑の諸仏が 乗り客で  
地藏菩薩が 船頭して  
西へ西へと 急がるる

#### 都和讃 (五十才以上の老婆の新仏)

そもそも都の かたわらに  
子と申せし 女人あり  
女人の助かる 道はなし  
弥陀の浄土に 願をかけ  
助けたまえと 弥陀如来

#### 箱根和讃

箱根の麓の 夫婦石  
一つの塔には 杜鵑  
一つの塔の その上に  
弥陀の三仏が 立ち給ふ

#### シカシカ

バンパ踊に先きだち、青年団長または役員が独特の節まわしで唱え、全員がくぎりくぎりにシカシカと合槌を入れる。その要旨は、まず死者のおくやみをのべ、さらに初盆会の由来を説くものである。

東西東西御静り玉へ 誠に世はうみつれ有為転変と申せども 月にむら雲花に風 花は根に帰し鳥は古巣に帰れども 帰らぬは死出の旅 ここに当村何某……長々御病気の処御養生御叶ひなく 遂に御死去遊させられ、御親類様方の御なげきは浅からずここに孟蘭盆教の謂れあり  
昔釈迦の御弟子目蓮尊者の御母公 永々病の床に臥し給ひ千里の名医集りて 医術を尽し給へ共、耆婆扁鵲も及ばねば 遂に御死去遊させられ前世の罪の深くして 阿鼻地獄に墮罪し給ふ 其時目蓮尊者大きに御なげきかなしみ給ひ 何卒母のくるしみ救わん者をと 雨を車軸に降らずれれど 同じく火炎と燃へ上る 是れ我力及ばじと御師匠釈迦の御元に寄り 何卒母の苦しき助しめ助かる御法あるならば 教え賜へとありければ 如来答へて曰く 前世の罪の重ければ 汝の力の及ぶ所にあらず 高さ九尺に棚を架け 三界萬霊の位牌を供へ数多の僧を呼び集

め 百ヶ日の御思講を勧めなば 其功力にや地獄あがり致さん者をと 教へ賜へば其儘に 高さ九尺に棚を架け 三界萬霊の位牌を供へ うづき中の五日より 文月中の五日迄 一万部の法華供養とや 其くりきにや地獄あがり遊ばさせられ 当月中の五日とや 西方弥陀の浄上に御往生遊ばさせられ候 其時目蓮尊者大きに御喜び賜ひ 各々其笠矛の下に入り 衣の袖をふりたて踊らせ給ふ 其学を茲に当村老若男女集りて ばんぱ踊を取組候 是れ伝来の遊ひにあらず 歌ふも舞も法の道 見る人聞く人ともに蓮の台に遊ばんものをとや 笛の歌口太鼓の音占め 三線の糸の音を調べ さあさ おんどを始めたり始めたり

(変体がなカタカナはひらがなになおした、原文中赤○の位置を口読点と考え一字あけた)

## (五) 史料

### 1. (伊南家先祖事跡録)

……(首欠)……

魔逆之信力堅固、則外道障之今古其類多嫉人善根、村民明暦元年丑興之盜棟札口不出之、然共先祖天正年中之棟札<sup>(欠)</sup>口不出之然共先祖天正年中之棟札証據有之上者村民不及儀条本願主之棟札納神殿早、古事多端故畧<sup>(欠)</sup>口其大綱耳、

一、天間村從己前如永御座有之、堂宇小微而不過入陸五濁末世界惡業凡積増<sup>(欠)</sup>口而不知仏菩薩在<sup>(欠)</sup>目前而同、夜之作獄苦種子思善根也、凡禹之刻也、我祖与三兵衛為後生善処寛文式癸寅京都就興門跡講寺号、即寺改正円寺、其時之住僧法名賜了庵、誠先祖代々之仕置不違枚挙以一知万謂衷是也

一、天間村之道路峻阻、而凸凹、或ハ巖石或山高或川深而人馬苦於往来干見不忍聞不熟憶夫造道路者救人馬苦有菩薩之之同六度万行能夫人人救人名菩薩、誰夫作之哉、我白地之凡夫而何得救人哉、善根有何時親子相廬而云人間之露命危衰者難過今日世者無常也、然還為百年謀、誠虫非而虫傷、放心而行衆惡凌他自高而違橋慢不散神明、不信三宝不知、因果報応之理終日汲々乎為利所使、昨口者知非而転罪思今日者求是而崩岩石成平路、橋深川而通大道、到今人馬往来不斷大通泰広而無易無難、村民不加助力、其功終成就平、是我親与三兵衛仕置也、

一、天間村用水無之故唯待兩天草木田地油之雖有大河之流深深而不得之故、天不雨則旱魃時刻雖遠山富貴也、我居所者飢饉也、斷朝夕蒸糶之烟村民干相共非嘆無止、然も用水非手無企、予親父与三兵衛尉遠慮廻謀而、維時寛文九年酉之孟春於村民語而云、無井手者五

穀不熟、田園不実、各々出人夫掘水道否村民同機相應而水道掘裏千間餘、漸水流而潤十分一也、同十年戌之仲春、同十一年亥之孟春凡三ヶ年相続而高処掘之深処者淺之、僻処者直之、故水流始算而潤諸草万木田地百倍昔日、村民相与悅而服鼓田舎、翌年之夏五月霖雨大風之節水道掘拔悉崩落為平地如昔日、嗚呼三年之功一時滅、誠是時節到來何堪恨也、予於于慈先祖代々之功豈空之也、維時貞享四年孟春亦己前之欲企掘拔而、或集其匠石、終日辛苦、或聚其人夫、終夜相謀村民聞之笑云、從己前雖掘拔之終無其印、何以志人<sup>(イ)</sup>力得成之也、相集而笑、平憶見為人善而笑者甚<sup>(イ)</sup>□業而善提之障也、或者亦隨喜則其功德無量也、看或惡而戒之本善則同菩薩之慈悲、一人有悅則万民競而相賀為仁・義・礼・智・信之本、故不恨人之非、褒人之不悅人々分別之到处也、終不<sup>(イ)</sup>。厥助力而其功如思成就畢到今流水如大河而溢遠村近隣之田園、是誠予謀之記也、大凡天正十六年以來到今元禄八年百十年也、誠先祖代々之仕置神社・仏閣・道路・橋・井手・用水不殘仕畢、是我等不為害人而国家太平・村民豊樂・子孫繁榮致為仏果有也、代々到子孫存斯舊記再興之者也、由緒書示人夫糶米銀子諸遺之入目者別書有之条不克多筆者也 己上

千時元禄八年己亥

仲秋 吉祥日 伊南伝衛門尉家英

## 2. (伊南次郎兵衛覺)

當村、伊南氏、代々社山神之祠再興之儀任先例元禄八亥年伊南伝右衛門尉家英信巧之願文発諸力加再興之神社之靈法蹟、其上於當場禪堂建立正門寺号、善堤之巧求、剩當村境地依<sup>(イ)</sup>為不□田畠用水人家之通路并山林境場至迄任託藍成就之、五穀豊饒之情德禱依之、右之意趣筆記加早、委前書依有之不能詳、然処正德四年年猶以嫡男次郎兵衛定道願慮加、一族伝兵衛家来彦助申者、雖愚身志成依助力石ノ鳥居再興、猶亦別神巧成山神之類号改、於山原山執行之當場八幡宮号、其後享保四亥秋扨殿加修理、修理後豊前国宇佐郡寒水村名主八右衛門達兩興之者也、誠子々孫々村民繁榮長久祈永々巧楽、伊南氏代々神巧前書記所之趣以如件、

享保四亥曆十月中旬

伊南次郎兵衛尉定道

## 3. (八幡宮造営覺)

先祖代々存即記八幡宮御造営文政四己年九月吉日、御上棟旨趣者、尚天下泰平御武運長久奉祈新也正門甫建兩世主、伊南寿一郡定治

大朱妙典一部奉書寫納

安政五戊午年、摘子伊南林左衛門定良

保食命御宝殿普門品一軸同斷

正門寺御仏前三部妙典同斷

## 4. (正円寺梵鐘銘)

天禄十四年辛己年

二月吉祥日

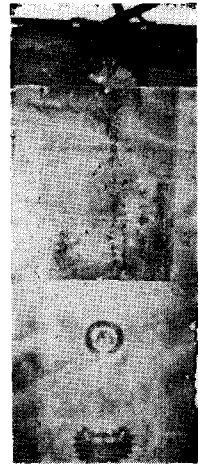
施主 天間村伊南伝右衛門尉  
家英

同村 正円寺

豊後府中駄原町

大工植木三郎兵衛尉政次

## (尊形仏)



## 5. (方便法身尊形佛裏書…)

正円寺什物)

本願寺釋寂如(花押)

宝永二歳乙酉三月四日

方便法身尊形 興正寺門□端坊

覺正寺下駄後園

速見郡由布院天間村正円寺物

願主 釋 了説

## 6. (天間八幡に寄進箱書)

正徳六申歳

八幡宮奉舍進<sup>(イ)</sup>肥後<sup>(イ)</sup>願主 吉田 伊定

七月初二日 告天間村氏家<sup>(イ)</sup>敬白

## 7. (天高堂木造佛墨書銘)

寛政六寅年九月廿五日

同秋象人依□

施主 伊南収右衛門

堂子中 □



## 8. (豊後国志卷之三……天間は元由布郷に属す)

東畠・椿・山口・捏山・温湯<sup>一曰</sup>嶽下<sup>(イ)</sup>・並柳・石松・水池  
幸野・小平・畠・平原<sup>一曰</sup>支<sup>(イ)</sup>之・湯平<sup>同上</sup>・津津良・山浦・  
花合野<sup>山浦</sup>支<sup>(イ)</sup>・内徳野・前徳野・中園・下依・中依・光



永・妙祖・山崎・平・石武・荒木・南乙丸・北乙丸・  
山石原一日若杉・塚原・天間  
以上三十三村 舊属ニ由布郷ニ。郷在ニ郡西南ニ。

伊南 精市	伊南百太郎	伊南 法醇
伊南 與市	原 安三	宇杉重太郎
田中 勘十	吉田仲太郎	伊南菊二郎
田口 文吾	田中 宇市	原 繁市
河野 利吉	田中 信太	小野 市平

9. (豊後国志卷之三…天間川)

天間川、出ニ由布郷山石原村ニ。東北行遠。鑿戸山鞍  
嶺至ニ喉石ニ。北流過ニ天間西ニ。為ニ二豊之界ニ。  
竟入ニ豊前國ニ。

13. (伊南系図抄)

……(首略)……九州ニ趣ク頃ハ天徳二年三月四極山  
ノ麓ニ着、夫ヨリ有縁之地ヲ尋ケルニ、四月廿五日、  
右山ノ麓ヨリ出立、木綿山ヲ目當ニ西向ヒ尾崎ヲ攀テ  
遙カニ西北ヲ見レバ折節雨降り霧深ク四方ヲ埋ムニ此  
地雨晴テ日照四方皆山秀テ、森多ク、海遠キニモア  
ス是コソ、我有縁ノ地、天ヨリ知セタマフト悦ヒ、則  
此所ニ来ルニ家居ナク茅ヲ切テ平カナル所ニ家ヲ作テ  
家来ヲ市中ニ走ラセ、初テ住ケリ、安世津一郎身ヲイ  
タミテ使フ、右尾崎ヨリミテ雨中ニ雨晴日照ケル故ニ  
雨間ト号、右尾崎ハ初テ見、初テ此所ニ住居シケル故  
ニ柱口ト云、夫ヨク家頼(米)等皆畑ヲ開テ定胤ニ貢  
ス敬屈之礼厚ク行ヒケル則天徳二年午四月廿五日也、  
……(中略)……

10. (天高堂妙典塔銘)

伊南俊助安則  
国家安全万民快樂  
大乘妙典一字一石塔  
五穀成就子孫長久功德主  
文久元年辛酉年十一月吉祥日、

定鎮二男一八早世、家臣等ト云合セテ菩提寺ナキコト  
ヲ愁テ靈仏ヲ請敬シテ僧ヲ招テ住持ス、則村上ニ堂ヲ  
建ツ阿弥陀仏ナリ、宗旨天台僧ヲ獨麟ト云、定雄万寿  
二年十一月

11. (八幡天間宮こま犬銘)

願主當天間住 伊南新右衛門 娘敬白  
速見郡横灘 平田住 加藤家重 (敬白カ) □ □

定胤天徳二年草(オノ)□ヲ思テ村号雨ヲ改テ天間と云、治暦  
三年死

12. (伊南定勝君水利施功碑…碑文)

伊南定勝君水利施功碑  
速見郡天間村自古乏水利闢村苦之久尖村正伊南定勝君  
夙憂之竟文九年春聚村民謀以永路開鑿之事益以取水源  
干馭貫川上流山高溪深非穿岩壁通陰溝則不能也以其事  
之困難議不遂決君益奮勵反復説論議遂始決矣、君性実  
直果敢躬親督工事村民皆服從經三年竣工所灌溉之田  
致數十町之多村民大喜之豈料翌年五月霖雨暴漲陰溝水  
路悉破壞村民困苦如故、君第二子家英君承後為村正亦  
憂之口慨尊人遺業屢屢減再議溝恢復之事村民頗難之無  
復應者家英君奮然有所決自投私費貞享四年春始起工經  
年所劬精不止躬親取工具妻子飼食而助之反水通広谷村  
民始感君誠意皆謝罪來助工事遂得以復其舊至今灌溉洽  
給闢村頼以安矣矣父子兩君之巧也、今茲明治三十年村  
民相謀建石表其創業功德併記家英君偉業而以得干不朽  
村民來請余記其概略云爾、城内牧撰并書、

維春  
勇力弓ノ達人緒方三郎維義聞勇名永ク當村地土タルヘ  
シトナリ、維ノ字ヲユルス、當地形知人ナシ、治承三  
年三月死、道鑑ト云、

(三重右側より)

発起並建立人  
伊南 民三 伊南 万太  
伊南和一郎 伊南藤二郎  
世話並建立人  
久保幸太郎 田中 新平 河野政太郎  
小野小十郎 久保辰二郎 原 玄二郎  
田中 源吾 吉田 嘉市 伊南 健平  
山浦村寄附 近藤由太郎  
(三重正面建立人)  
伊南 儀市 伊南 林太 伊南持太郎

定清  
維尹嫡武威ノ間有、山林ニ籠リ狼籍ノ賊ヲ亡ス、尚仏  
心宇婦依ス、大友親世公愛ヲ蒙ル、則天台ヲ改メテ禪  
宗ト成ル、天高寺建立、一邑不殘且那タル天高寺初祖  
無羊ト云、府中万寿寺下巴山号長海山ト云、

(以上関係史料一部収録す、系図抄再調査の要あり)

(六) 天間地方年表

西紀	年号	干支	事 項	出 典
			<ul style="list-style-type: none"> <li>各地に弥生土器の細片を見る、古くより生活舞台として開かれたものごとし</li> <li>古くは、塚原等と共に</li> </ul>	

867	貞観 9 年	丁亥	山布郷に属し、山香郷の南端とは別の文化圏を構成していた。	豊後国志	1671	寛文 11 年	辛亥	村民と協議、駅貫川上流より水路工事にかかる。	水利施工碑
958	天徳 2 年	戊午	・ 1 月 20 日、鶴見嶽噴火、鳴動 3 日に及ぶ。	三代実録	1672	寛文 12 年	壬子	・ 天間井路完成し、村民大いに喜ぶ。	全 上
1285	弘安 8 年	乙酉	・ 「伊南定胤は相馬小次郎将門の叛逆に逢い利あらず原源左衛門家忠・久保喜太郎・中村勘助・田中二郎・安世津等を引具して九州に至り、3 月四極山麓に至る」という。	伊南系図	1673	延宝元年	癸丑	・ 5 月、豪雨あり、天間井路悉く流失し、村民再び困窮す。	全 上
1466	文正元年	丙戌	・ 4 月 25 日伊南氏天間に定住すといふ。	豊後国図 日報	1687	貞享 4 年	丁卯	・ この年大雨洪水あり、春、伊南家英村民と天間井路修路修復にとりかかり、その年完成す。	全 上 実相寺縁起
1626	寛永 3 年	丙寅	・ 10 月、大友頼泰、豊後国図田帳を鎌倉幕府に注進す。	前掲写真 (塔銘文)	1694	元禄 7 年	甲戌	・ 貝原益軒天間を通る。	全 上 豊岡紀行
1637	寛永 14 年	丁丑	・ 天間路傍に石幢が建てられるこの頃各地に石造の塔が建てられる。	塔 現 存	1695	元禄 8 年	乙亥	・ 伊南伝右衛門先祖事跡記録を綴る。	事跡記録
1647	正保 4 年	丁亥	・ この頃、おおこ小野に五輪が建てられる。	天間八幡 狗犬	1701	元禄 14 年	辛巳	・ この頃、小長勘左衛門代官の支配下にあり、天間村は田畠合 132 石であった。	豊後国郷 村総記
1662	寛文 2 年	壬寅	・ 宮ノ本寶篋印塔はこの頃か。	全 書	1705	寶永 2 年	乙酉	・ 2 月吉祥日、正円寺の半鐘鑄造さる、施主伊南伝右衛門、大工は植木三郎兵衛尉政次であった。	鐘 銘
1669	寛文 9 年	己酉	・ 平田住加藤 <small>(欠)</small> 重・伊南新右衛門等狗犬を寄進す。	全 書	1714	正徳 4 年	甲午	・ 正円寺方便法身仏裏に「本願寺釋寂如、寶永二歳乙酉三月四日…」の文字あり。	開基仏絵 像
			・ 伊南与三兵衛貞宗本派正円寺創立、釋了安を以て開祖となす。	豊後国郷 帳	1716	正徳 6 年	丙申	・ 由原八幡宮神主の祭典執行により、天間の山神社をを八幡天間宮と改め、神社造営をはじめむ。	棟 札 写
			・ 天間住人、椎高・彦市・弥左衛門・小左衛門等嶋原台戦のため旅立つ。	全 書	1719	享保 4 年	己亥	・ 10 月燈籠塔 2 基八幡天間宮に寄進す、	塔 銘 文
			・ この頃、代官小川藤左衛門の領分で村内に松山多し。	全 書	1794	寛政 6 年	甲寅	・ 10 月吉祥日、八幡天間宮に鳥居を寄進す。	鳥居銘文
			・ 3 月 21 日、総石高 93 石 8 斗 9 升 4 合でその内田高は 57 石 7 斗 1 升、畠高は 36 石 1 斗 8 升 4 合であった。	南端村史 年表 速見郡史	1803	享和 3 年	癸亥	・ 7 月、天間村、氏家八幡宮に肥州助宗の名刀を寄進す。	箱 書
			・ この頃水利の便悪く日損所あり、	伊南記録	1821	文政 4 年	辛巳	・ 八幡天間宮の拝殿を修理し、神社としての体裁を整える。	伊南記録
			・ 秋了庵(安)上京し、本願寺につきて寺号を受け正円寺と号す。					・ 天高堂に、細井玄清作木造仏が安置される(16軒共有)。	墨 書 銘
			・ 正円寺内に方便方身仏像を設置す。					・ 豊後国志に天間川について	豊後国赤 巻の三
			・ 春、伊南与三兵衛定勝、水利の不便をなげき、					・ 「天間川、出 山布郷山石原村。東……」とあり。	
								・ 八幡天間宮修理	



別府市文化財保護委員会会報 第7号  
発行日 昭和51年3月30日  
発行者 別府市立図書館  
別府市上田の湯町 6-37  
印刷者 日の丸印刷株式会社